

「耐寒マラソンをどう見るか」

(225号 1995. 2)

投書から

1994年12月26日付けの毎日新聞には、小学生の子供を持つ生駒市在住の母親から、次のような投書があった。

「真冬でも長ズボン禁止なんて」

私はフィリピン人です。日本人と結婚して3人の子供がいます。長女が今年、小学一年生になりました。生駒市はとても寒いのに「体を鍛えるため」と真冬でも、長ズボンは禁止です。体操の時間は、半ズボン、半そでの薄い体操服です。そんなに体を鍛えることがよいことなら、先生もすればいいと思うのですが、先生は温かい服装をしています。「寒さに負けない体をつくる」というのですが、自分が実行できないことを児童に強要することは、いじめとしか思えません…。(以下略)」

投書から、この時期になるとどの学校でも行われる耐寒マラソンの場面が想像される。音楽が鳴り、全校児童が一斉に運動場を周回する。多くの学校で行われている耐寒マラソンが、今どのような位置づけをされ、取り組まれているのか、また、どのような問題をかかえているのか、各校での様子を探ってみることにした。

両極端な耐寒マラソン

2週間から多いところで1ヶ月間、耐寒マラソンが行われている。学年により周回するコースが決まっており、時間は毎朝5分から10分程度。走り終わった後は、その日に走った距離を、チェックカードにぬりつぶす。最後の日、校区を走る「マラソン大会」が行われる。保護者が沿道で声援をおくり、運動会には及ばないものの、地域と一体となった体育的行事としての一応の盛り上がりを見せる。

耐寒マラソンは、いつから始まったのか調べてみたが、資料が見当たらない。「耐寒マラソン」という言葉がないのである。ただ、現代学校体育大事典には、運動行事の中のトレーニング的行事の項に、「校内マラソン大会」「業間体育」と並列して、記されている。「校内マラソン大会」の下準備として、毎朝走る「耐寒マラソン」が行われるようになり、毎朝走った結果をマラソン大会で出す、この目標の下で、耐寒マラソンが行われていたことは予測可能である。「耐寒マラソン+マラソン大会」のセットされた形をとる耐寒訓練が従来の形であったようである。

しかし、「マラソン大会」であるがために、少しでも早く走ろうと無理をし、体の不調を訴える子どもが出たことや、近年の車の増加による交通事故が懸念されるために、マラソン大会をとりやめ、校内もしくは学校近辺での耐寒マラソンだけを行う学校が多くなってきている。形骸化された耐寒マラソンだけが残っているのである。また、その一方で、従来の形を取っている学校も少なくない。「体力づくり体育」を今も引き継いで積極的に行っている学校には多いようである。

何が問題か

①鍛錬主義・精神主義

投書の半ズボン、半袖にあったように、全くの非科学が耐寒マラソンには持ち込まれる。また、耐寒マラソンの目的が、体力づくりと言うよりは精神の鍛錬になっている。

②授業と結びつかない

耐寒マラソンを授業の延長として位置づけたいが、時間的、場所的な問題から、音楽を鳴らし、適当に走らせることが限界である。授業で行った「ペースランニング」が生かされない。

③自由な時間であるはずの休み時間を奪う

④子どもの声から

多くの子どもが、耐寒マラソンに対しては否定的である。その理由としては、寒い(寒い服装で走らされる)こと、つまり、走る以前の問題なのである。

(⑤) マラソン大会の問題

・どうしても、競争になってしまう。それを回避するためにグループを編成して走らせるということも試みられるが、個人競技をグループ走にするという矛盾が起こる。

・遅い子どもについて励まし合いながら走る姿は美しいが、それを良しとすることなのかどうか、賛否が分かれる。

耐寒マラソンの行方

近年の、ジョギングブームそして、フルマラソン、ハーフマラソン人口の増加。以前であれば、国際マラソンにしか門戸が開かれていなかった大会が、駅伝を含め、今や市町村の単位で、市民レベルで開かれるようになった。一体このブームを支えるものは何なのか、初めてフルマラソンに挑戦した職場の同僚はこう語る。「42.195キロのゴールが見えたとき、自然に涙が出てきました。いい年して恥ずかしい話なんですけど、よくやったって自分をほめてあげたくなりました。」彼は、マラソンの魅力にとりつかれ、それ以降、多くの大会に参加している。彼の参加の仕方は、あくまでも自発的なもので、決して強制された参加の仕方ではない。走るのをやめて歩こうと言うこともできるし、それはあくまでも自由なのである。

大人がマラソンを愛好するように、子どもにもそんな走る楽しみ方を与えられないものだろうか。怒鳴られ、走らされ、そんな耐寒マラソンが「走ること嫌い」の子供を産み出しているのではないだろうか。「走ること嫌い」にさせられた子どもが、大きくなってマラソンと出会い、初めて走る喜びを得るとするならば、学校教育での耐寒マラソンの役割は一体何なのか、改めて考えなくてはならないのである。

そこで、編集部としては、大きく2つの方向性を打ち出した。

①耐寒マラソン（マラソン大会を含む）は不要という立場から

・70年代前後の「体力づくり体育」では、業間体育と並び、耐寒マラソンも積極的に進められてきた。そして、その結果、「運動好きの体育嫌い」の子どもを量産した。この反省に立つと、体力づくりが目的の耐寒マラソンも否定されるべきだろう。走る素晴らしさや走る科学を知ることは授業の方が充分実現可能である。形骸化された耐寒マラソンであるならば尚更のことである。

②耐寒マラソンを積極的に認めていこうという立場から

・従来の耐寒マラソンのイメージを一新しなければならない。例えば、しんどくなったら、歩いても良い自由、温かい格好をして汗をかいてきたら脱がせるような指導などが考えられる。また、マラソン大会も、授業（ペースランニング）の延長として捉え、自己の目標タイムを設定して走る。もちろん、歩いても良い。同じペースでの完走を一つの目標とするのである。（これは、すでに実践している学校もある）「走らされる」耐寒マラソンにしないことである。

以上、耐寒マラソンの持つ、否定的な側面を述べてきた。結論としては、管理の下で行われる耐寒マラソンをなくさなければならないということである。そのためにも、教師自身が耐寒マラソンの持つイメージを変えることに尽きる。しかし、未だ主たる体育の目標が、体力づくりであると信じる教師も少なくないことから、鍛錬主義・精神主義がはびこる原因ともなっているのである。学習指導要領に、「体力は結果として得られるものであり、直接的な目的ではない」ということを明記しない限り、教師の意識変革はできないだろう。とにかく、今一步踏み出して、鍛錬主義・精神主義を排除すること。そうしなければ、子どもに対するいじめとしか見られない耐寒マラソンになってしまうのである。